

日本における英語教育 — JET プログラムを中心に —

ヴァルガ・アグネス

はじめに

本研究の目的は「生きる力」を持って、国際関係の仕事においてグローバル活躍できる人材をどのようにして育成すればよいのかについて検討することである。まず、歴史において英語教育に貢献した外国人について概観し、次に 28 年間実施されている JET プログラムを中心に ALT の課題と JTE のメリットを検討し、外国人 ALT より JTE を雇用することの意義について考察する。その際、日本人学生へのアンケート調査から ALT の効果の把握を試みる。最後に東広島市内の小学校での英語教育実践の参与観察から、ALT と JTE の授業の課題と展望について検討する。

1. 英語教育の歴史－英語教育に貢献した外国人を中心に

Tajima (1976) は日本における英語の重要性の認識が 19 世紀初頭に徳川幕府が外交の言語をオランダ語から英語へ変更したころから始めたと述べている。幕末以降、鎖国政策が終わり、交流・貿易が盛んになる明治時代に入ると欧米の文化および知識を取り入れるために英語が読解による修養のため不可欠な手段になった。明治時代の学生は英語教育に対して意欲旺盛であり、欧米文化を同化することも吝かでない態度を見せた。1886 年中等学校で英語を第一外国語として教えられ始めた。しかし、大数の欧米文献が翻訳されたとともに以前の勢いがなくなり、各科目の授業は英語に依存なくなり、日本語で教えられるようになったため、英語教育のレベルが落ちるのは当然の結果として起こった。伊村が述べているように明治 20 年から地方の官公立学校のために青年会英語教師を雇用はじめた。第一期(1888～1895)にアメリカ・カナダの親卒業生は 15 名が来日し、第二期(1900～1928)に 99 名が来日し、地方の中小都市の公立中学校で、安い給料で、主に会話や作文を教えた。松江の中学校に教師として務めていた Lafcadio Hearn (小泉八雲) もその一人だった。日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦を経て、日本の海外が貿易するの進展につれ、英語授業時間が増加した。大正時代にかけて昭和 6 年(1919～1931)日本政府が外国人を非常勤の嘱託教員として雇った、安部(2007)も某福岡県立高等学校に現役した二名の外国人教師について記載している。イギリス出身教育学者、音声学学者ハルロッド・E・パーマは 1922 から 1936 まで日本に活躍した。パーマは自ら提唱するオーラルメソッド(口頭教授法)を東京高等師範学校附属中学校で実施した。しかし、この政策が実施される間、効果的国際政策を進めた日本は第二次世界大戦に導くナショナリズムがだん

だん強くなり、英語が敵国語として避けることとなった。そして高等学校では英語授業が廃止された。その後、太平洋戦争の終結とともに再び英語教育が盛んとなった。

JET プログラムと類似するものとして、多数の外国人が英語教育の改善に資するために来日する活動が三つあった。第一は、快速に文明開化（西欧化）をするため、明治時代の「お雇い外国人」を招くことだった。第二は、連合国軍占領下の日本に、アメリカから教育顧問を連れてくる活動だった。第三は、JET プログラムの直前、昭和 44 年（1969 年）から始まった昭和文部省と在日合衆国教育委員会による助手招聘制度の参加数と昭和 52 年（1977 年）から始まった MEF（Monbushou English Fellows）であり、アメリカから来た英語指導主事助手を合わせると昭和 61 年（1986 年）までに 1021 名が来日した。当時の人数は現在の JET プログラムよりはるかに少なかったが、先駆けであった。海外から教師ではない青年英語話者を採用するはそれほど珍しい観念ではなかった。

2. Japanese Exchange and Teaching Program (JET)

1) JET の歴史と現状

JET は昭和 62 年度（1987 年）に開始され、アメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドの 4 か国から英語を教えるために 848 人の青年英語話者を雇用した。その中 813 名は公立中・高等学校において外国語指導の補助等を行う「外国語指導助手」Assistant Language Teacher(ALT)だった (<http://www.jetprogramme.org/j/introduction/history.html>)。JET プログラムの歴史には二つの大きな変化が見られる。第一は、平成元年（1989）6 カ国の英語圏（アメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、アイルランド）に加え、対象言語をドイツ語、フランス語も含め、まだまだヨーロッパの言語から離れていないとはいえ、英語学より外国語学へ移動したことである。第二は、1992 年に中国語、1993 年韓国語を加え、グローバル化の道を歩き始めたことである。それから拡大し、現在まで 43 カ国から 4783 人が JET プログラムに参加することになった。各中・高等学校へせめて一人の ALT を送れるように、人数が増やそうとした。

2011 年から小学校 5、6 年生に対して「外国語活動」（主に英語授業）が必修の教育の一つになった。ALT が小学校に訪ね、音声を中心に遊びながら簡単な言葉を覚えさせ、ゲームなどを子供たちにやらせるというものだ。最近、所々の小学校で模擬外国語活動授業に 1 年生～4 年生の生徒をも対象とした。それが将来必修科目の一つとして、各小学校に取り入れる可能性が高い。日本人にとって馴染みのない発音を幼少期から慣れることは非常に役に立つ教育と考えられている。

そして近年、英語教育はこれまで以上に、日本にとって特別な位置づけとなった。会社などの要求によって英語教育が強調されている。スーパーグローバル化の名において「我が国の高等教育の国際競争力の向上及びグローバル人材の育成を図るため、世界トップレベルの大学との交流・連携を実現、加速するための人事・教務システムの改革や、学

生のグローバル対応力育成のための体制強化など、国際化を徹底して進める大学を重点支援する」ことを目的とし、大学のみならずスーパーグローバル高校も現れてきた。

JET プログラムのメリットは、生徒の視点から見れば外国人と出会い、異文化に触れることである。日本人教師 (JTE) の視点から見れば、海外へ行かなくても、習った英語を ALT と直接に使用することが可能になるため、英会話力を向上することができる。また、外国人は日本人と外見で（もしくは中身も）非常に異なるため、面白いということで、Meerman (2003) も示したように ALT が意識しなくても、子供たちに英語を学ぶ意味を与え、そして team teaching(TT)教育方法が学生のモチベーションを上げる。

一方、同学校で ALT が一週間一回、二回程度しか授業に参加しないのため、時間が少なすぎる。その上、広島県に小学校や中学校で教えている ALT によると、ALT が行なうタスク学級担任の反応もさまざまだ。「教師のほとんどが TT にちゃんと協力しているが、時々日本人教師が外国語活動に対して嫌な態度を見せる。学生の前何も言わないんですが、時間の無駄だと思っているのだろう。学生たちはそれに敏感だから、日本人教師は態度を気をつけたほうがいいと思う」

ALT や JTE の視点から見ると、中・高等学校の ALT のほとんどは教育資格を持っていないため、成績をつけることができない。そのこともあって、ALT と JTE の立場はなかなか平等にならない。「職場で今まで何回も『若いね』と言われた。それは若いから、甘く見られるからではないかと思い始めた」とある ALT が述べていた。その反面、インタビューを行なったとき JALT (日本人 ALT) が以下のように述べた。「ある会社から ALT が来たとき、JTE と私が同じ線に並んで、立つことは禁止された。クラスの後ろまで行って立つか、もしくは ALT の後ろに立つか、とりあえず会社から ALT の横に立つことを禁止された」ALT が JTE との親しい関係を進展させた例もありながら、一方必要以上の相談を避ける例も見られる。

長年にわたり、様々な問題が見られた。JTE が ALT が日本の英語制度詳しく知らないのに、頑固に意見を表すこと。全体主義の概念を完全に理解していない個人主義で育った ALT はわがままで勝手に行動する。ALT が特に文法中心方法を批判し、実際に使えない英語の一言語使用の教え方を必要とする。日本人の壁が ALT の中もよく話題になる。また ALT には「以心伝心」が伝わらないため、伝達の難しさを ALT と JTE の双方が主張している。日本人が既成概念を元に異文化理解といって、外国人や同じ国の人々を一緒にし、個人的差異を忘れ、個人より自国の代表として扱うということが ALT の悩みの一つと述べているが、固定概念化は日本人と外国人両方よくする。その話はさておき、本稿の目的は ALT と JTE の不平不満を述べることではない。英語教育、それは青年を養うことである。将来のために「生きる力」を持っている、国際関係の仕事において活躍できる人材をどのようにして育成すればいいのだろうかを問い、それを答えようとするのが本研究の目的である。日本はまだ国際的に見ると、TOEFL、TOEIC、IELTS において低い平均点数しか獲得できていない。2014 年の TOEFLiBT test data の合計点数を見ると日本は平均 70

点を取り、アジアでアフガニスタン、カンボジア、ラオスを上回っている。2013 年、日本人の平均スコアは 512 点 48 カ国中 40 にとどまった。以上の段落から、近年英語は世界のリング・フランカとして特別な役割を果し、英語を話し、国際関係を築くため英語および英語教育の重要性が強調しているのに、まだまだ英語能力が足りないと言える。

その理由として以下の三つの問題をあげる。

- 日本における国際化は実際には来日した外国人を「日本化」しているだけではないか
- 外国人 ALT と JTE 様々な部分において異なる。例としてモデルの種類が挙げられる。(Medgyes 1992 年) 筆者はモデルとして「学習モデル」(JTE)のほうが EFL 学生を動議づけやすいという点において英語教育には効果的であると論じている
- ALT が英語の授業のあと、日本語を使うことによって、日本人生徒の英語を用いて、コミュニケーションをとらなければならないという概念を歪めてしまう可能性があるとする

2) 日本と国際化

英語が EFL(English as a Foreign Language)として教えられる国々の大きな悩みの一つに注意を引きたいと思う。英語教育の範囲はどこまでなのか。英語教育は文化を教えるべきか。どの国の文化を教えるべきか。そして、学習者が異文化を勉強し、その知識をどう活用すればいいか。国際化とは日本でどういう意味を示すのか。

「一般に、『その国の言語を学習することは、その国の文化を学習することである』と言われるとおり、言語は文化や歴史、気候や風土、民族性とも密接不可分の関係にある」と、海外における日本語の普及促進に関する有識者懇談会の最終報告書で書かれているとおり、言語はある集団の価値観、考え方を表しているのだから、言語を教えると同時に、文化を教える必要がある。どの文化を教えるのか。現在、英語は国際共通語(international language)リング・フランカとして世界中教えられているから、日本にも外国語活動といたら、主に英語教育を意味する。2015 年 JET プログラムの統計を見ると、JET 参加国は 43 カ国であり、参加者は 4,786 人であることが分かる。その中でアメリカから来日した ALT 人数は合計 4404 名であり、全参加者の 58.9%を示している。また、全参加者の 32.3%はイギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、アイルランドから来日しているため、英語圏の外国語指導助手(ALT)は JET 参加者の 91.2%を占めている。英語圏の国々でも各国の文化が違う。その上、英語が国際共通言語として使われているため、英語を使い、自分の文化を言い表すことができるから、文化を教えるより英語能力に集中するべきだという主張もある。しかし、英語圏の若者を雇うと、いくら国際文化的英語教育と言っても、その人たちが一人一人持っている文化を見逃すことはできない。

現在、外国語活動で外国人のお客さんを招待し、小学生にその国の言語、社会、食事、生活、また小学生の日常生活や遊びについて日本語で発表が行なう。高校生との触れ合い活動に参加し、異文化理解活動が行なった。習慣の差異を分かった上どうするかは日本人高校生にとって答えにくい(考えたことない)質問の一つだった。挨拶の場合、欧米の握手すると同時にお礼をするなら、二つの文化が近づく印象があるから、解決しやすいのだが、欧米文化は日本文化と余りにも異なるため介しにくいだ。JET プログラムは「外国語教育の充実と地域レベルの国際交流の進展を図ることを通し、日本と諸外国との相互理解の増進と日本の地域の国際化の推進」という目的で活動している。しかし、「国際化」という概念は外国人の方々と日本人のコンセプトが違う。McConnell (2000) が述べているように外国人の希望で国際化は日本人と自分の間の線(壁)を崩す。日本人の反応を見ると崩すものの、以前より深い線を引こうとする。Butler (2004) が小学校での英語教師が必ず操らないといけない英会話能力を三つの国(日本、台湾、韓国)で比較した。その中それぞれの国の教育目的を述べたとき、日本で異文化理解を深めることおよび基準英会話を身に着けること以外 To develop a sense of self and of what it means to be Japanese 自己の感覚を開発し、日本人とはどういう意味かを探究することも目的の一つとして書かれていた。一方、韓国や台湾がそういう内省の方針が見られなかった。もちろん、文化の差を経験するとき、自分の文化に反省することが当然であるのですが、McConnell (2000) も述べているように、若者の欧米人 ALT が期待している統合より、触れ合いに過ぎない。

さて、JET プログラムは国際化にどういう立場を表明するのか。JET プログラムの資格要件を見ると、第一一般要件は以下である。

- (1) 日本について関心があり、来日後もすすんで日本に対する理解を深める意欲があること。日本語を学ぶ努力をすること又は学び続けること。日本の地域社会における国際交流活動に参加する意欲があること。

1. Be interested in Japan, and be willing to deepen their knowledge and appreciation of Japan after their arrival; make effort to study or continue studying the Japanese language prior to and after arriving in Japan; be motivated to participate in and initiate international exchange activities in the local community.

それに対し、「指定言語(例:英語圏の国は英語)について、現代の標準的な発音、リズム、イントネーションを身に付け、正確かつ適切に運用できる優れた語学力を有していること。また、論理的に文章を構成する力を備えていること」は条件の六行目だけだ。

これから(特に英語バージョンを読むと)日本は欧米化の影響を受けるより、外国人を「日本化」したがつているのではないのかと考えさせる。

3) 外国人と JTE はモデルとして

JET プログラム ALT の 91.2%は英語圏から来た。日本人ではないと見た目で区別できる人ばかりだ。母語話者なので全員英語ぺらぺらと話すことは当然であるから、日本人学生に与える影響が違う。Medgyes(1992)は教師モデルを language model(言語モデル)と learner model(学習モデル)の二つの種類に大きく分類した。Medgyes は NEST (native English-speaking teacher) が言語モデルとして、Non-NEST (non-native English-speaking teacher)が学習モデルとしてもっと相応しいと述べている。一般的に、NEST に比べ、Non-NEST の利点を六つ指摘している。1) もっといい学習モデルを与える 2) 言語学習戦略をより効果的に教えることができる 3) 英語そのものについてもっと情報を提供できる 4) 言語を学習するたびに現れる問題点を予想し、予防できる 5) 同じ文化・背景を持っているため、生徒の言語的、文化的、個人的要をより多く知っているため、生徒の必要なものにより敏感である 6) 生徒と同じ言語を母語話者として共有する。ALT の訪問は少ないため、恒常的モデルにはならないため、JTE に頼るしかない。Medgyes によると「Non-NEST は学習者としての第一任務は言語能力(この場合英語能力)を上達することであるが、筆者も同意見である。日本人の教師が英語での会話能力の成功を見せたら、生徒の手本になる。日本人同士である英語教師が母語話者と近いぐらい話せるとしたら、(特に若い先生の場合)生徒にその魅力をアピールし、「先生がこのレベル話せるのなら、私もできる」という気持ちが生じる。それを利用したら、生徒はより早く上達するのではないだろうか。従って、英語教育から見ると、外国人の ALT を雇うより、JTE を留学または国内セミナーによって JTE の英会話能力や国際化に寄与したほうがよいではないか。

4) EFL 生徒とコミュニケーション

明鏡国語辞典の略式な説明によるとコミュニケーションは「ことば・文字・身振りなどによって、意思・感情・思考・情報などを伝達・交換すること」だと定義する。でも、ヒューマンコミュニケーションの目的は何だろうか。Light (1988) はヒューマンコミュニケーションの目的を4つの種類に分類する。1) 要求や望みの表現—何かを得ようとし、他人のふるまいを規制するために 2) 情報の移転—情報を人物 A から人物 B に搬送するため 3) 社会的な親密さ—他人との関係を設立し、また維持するため 4) 社会的エチケット—礼儀正しさという社会的なしきたりに従うために存在しているものだ。EFL 学生は1,2 の目的を達成できるのなら、英語教育は成功したといえる。外国人は少数派の国々で以上の1,2,3,4 の目的を果たすにその国の言語が使われている。それは3,4 は自然にできるようになると思われるから。英語はクラス以外使用できないなら、EFL 生徒にとって英語は試験を合格する目的しか残らない。現在、JET プログラムはそれを防ぐため、活動しているが、日本に来る ALT は必ず日本語を勉強しなければならないので話が複雑になる。授業中、常に英語で話さなければならないということで、ALT がずっと英語で授業を行なうが、授業の後生徒と会話するとき、日本語または日本語と英語を混ぜて使う人が多い。

ALT の中、日本語をよく話せると全然話せない人もいるが、長い間小学校で教えてきた ALT がこのように述べた。「生徒と絆を作りたいなら、英語で挨拶したあと日本語で話し続ける」。このように外国人と「絆」を作る手段(コミュニケーション目的 3,4)は英語のかわり日本語だったら、生徒の頭の中にコンセプトとして英語はコミュニケーションのために存在しているものではなくなる。ALT が日本語が話せないと絆を作りにくくなる。生徒が ALT と英語で絆をつなぐことが練習しなかったら、他人の外国人とも難しくなる。日本語を全然話せないヨーロッパ出身の知り合いのインタビューが行なったとき、絆について以下のように述べていた。

ある東広島の小学校で 3～4 年生の学生に自国について、子供向け発表や遊びの活動に参加した。大学生が主催した活動だった。発表が実践行なう前、パワーポイントの内容について相談しようといわれて、会いに言った。その部屋で大学生たち(15 人でもいた)に囲まれて、発表の相談を始めた。ある人が英語で何となく発表の内容を説明して、ほかのみんな黙ってて、私を見た。内容の相談が終わった後、一分ぐらい誰も何も言わなかった。冗談でも、個人的な質問でも、天気の話でも、何でもいいから、集団の一人が何か言ってほしかった。すごく違和感感じた。結局、「以上です」といわれて、解散した。全体的にその相談も冷たくて、フォーマルだった。日本にいる間、日本人の友達を作れなかった上、meaningful relationship 心の会う人と絆を結びつくこともできなかった。

その大学生たちは将来小学校教師を目指しており、2～3 年間で ALT と team-teaching しなければならないことになる。

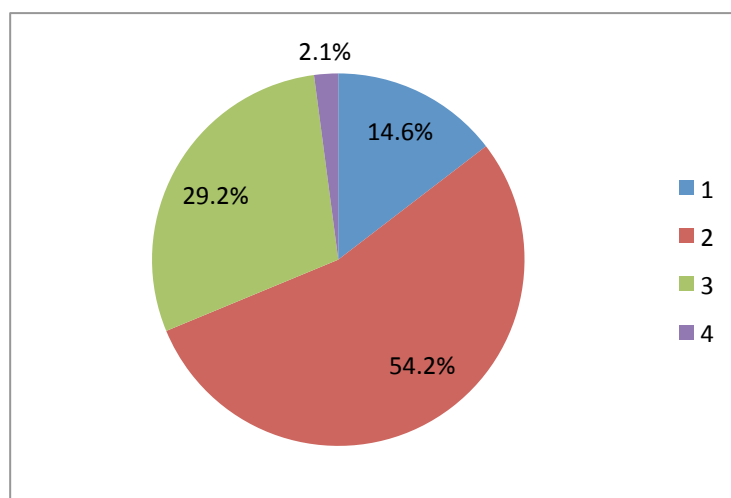
外国人(特に ALT)がかわりに英語を勉強し、話せるようになったら、それは生徒に日本語の重要さを確かめる一方ではないのか。それに対して、JTE は母語話者として日本語話せるので、そういうメッセージが伝わらない。代わりに Medgyes (1992) も述べているように、先生が対象言語をほぼ母語話者レベルに話せることができれば、それは「理想的」言語教師の第一アppeal となり、対象言語(英語)の重要さを強調している。筆者の母国、ハンガリーも同じだが、英語は目的よりコミュニケーションの方法だと明確に意識していないため、そこから始めればいいと思われる。

3. 大学生の英語に対する態度

現在広島大学に在学している大学生を対象にしたアンケート調査を次のように行なった。2015 年 7 月 12 日に広島大学キャンパスで、以下のようなアンケートを行なった。

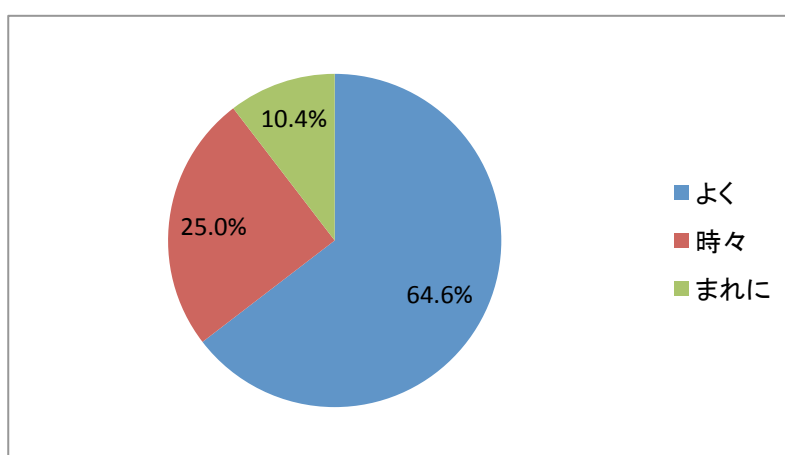
回答者(合計: 48 名)男性が 16 名、女性が 26 名、回答しなかった人は 6 名だった。平均年齢は 20.9 年、75%(36 名)は中学校 1 年生から英語を学習している。48 名は平均で 10 年間ぐらい勉強している。

質問 1 英会話能力自己評価 1（全然話せない）～4（よく話せる）



14.6% が全然話せない、54.2%がちょっとだけ話せると英会話能力を自己評価した。「英語を話す機会がない」「英語をどうして話せないか」と中・高校に受けた英語教育は文法中心だったから、実際に使える英語は身につける時間がなかった」よく耳にする。この学生たちが英語を平均 10 年間学習しているため、2005 年前後英語を必修科目として学び始めた。つまり、ALT との経験はほとんど全員あるだろう。2005 年までプログラムが実施してから最初の苦難もたいてい解決し、生徒の英語能力で JET プログラムのいい影響をもっと感じるはずではないのだろうか。

質問 2 周りに外国人を見かける頻度数



質問 3 外国人の友達と会話をする時どの言語を使う

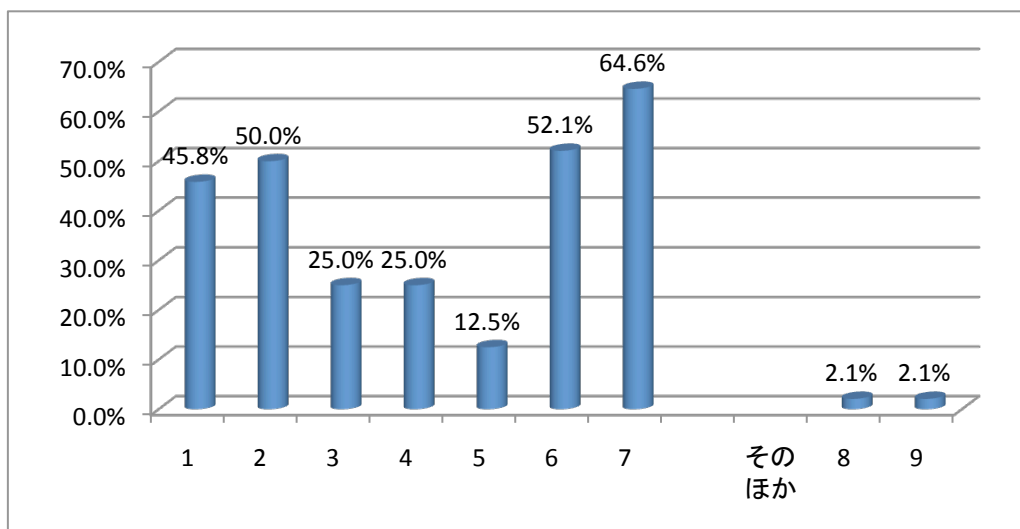
主に	日本語	21
	英語	18
	中国語	2
また	日本語	2
	英語	5
外国人お友達がいらない		7

「英語を使う機会がない」と広島大学に在学している大学生のほとんどが不平を述べた。しかし、広島大学生を対象にしたアンケート調査の回答者の中 64.6%外国人がよく見かけると答えた。また、21人は外国人の友達と話すとき主に日本語を使うと答えた。それに対して18人が主に英語を使うと答えた。しかし、外国人と話す機会が来たら、その外国人が日本語を話せるなら、多数の日本人が「ほっとして、主に日本語で会話をしようとする」と外国人の知り合いとのインタビューから分かってきた。

質問 4 外国人と英語で話しかけると、不安なことは何ですか。

選択肢

1. 発音
2. 文法的間違いをすること
3. 英語で話しかけると返事ができない
4. 言ってはだめなことを言って、相手を傷付けること
5. 英語で話すとき、周りの日本人がどうおもわれるかが心配
6. 相手が私の言いたい事を分かってくれないこと
7. 私が相手の言うことを理解できない
8. そのほか
9. 単語が分からない
10. 言いたいことがきちんと伝えられない



調査結果として、以下が明らかになった。

広島大学の学生のアンケート回答者の 14.6% が全然話せない、54.2%がちょっとだけ話せると英会話能力を自己評価した。回答者のほとんどが自分が英語がよく話せないと信じている。「英語を使う機会がない」などをよく耳にするが、回答者の 64.6%は周りによく外国人を見かけると回答した。また、21 人は外国人の友達と話すとき主に日本語を使うと答えた。それに対して 18 人が主に英語を使うと答えた。しかし、外国人と話す機会が来たら、その外国人が日本語を話せるなら、多数の日本人が「ほっとして、主に日本語で会話をしようとする」と外国人の知り合いとのインタビューから分かってきた。回答者の第一不安は自分が相手の言うことを理解できないということだ。第二不安は、相手が自分の言いたい事を分かってくれないということだ。第三と第四不安は文法的間違いをすることと発音である。つまり、対象者のほとんどは英語の正しい使い方に悩んでいるため、自身がなくなり、もし外国人の友達が日本語を話せることができれば、英語より日本語を選ぶ人が半分以上だ。

4. 小学校における英語教育の実践の課題

筆者は、小学校における英語教育の実践において、ALT がどのようにかわり、そこで児童がどのように英語能力を身につけているのかについて検討すべく、参与観察を行った。

その方法は以下のとおりである。

場所：東広島にある小学校

日時：5 月 13 日～7 月 8 日

期間：2 ヶ月に週一回、3×45 分

学年：5 年生、6 年生

授業数：年間 70 単位時間

クラスの人数：24 人～28 人

教室：英語教室の視聴覚教育用の教材が豊かであり、色彩に富んでいる。教育機器（電子黒板、フラッシュカード）の頻繁な利用

教師：各授業最小限 3 人 A：学級担任・B: ALT(日本人)・C: 監視者

時間配分：効果的に時間を使っている。時間で授業終わらせなかったことがある。(二回)

目標：分かりやすく書かれている。目標は明確である。

「お気に入り聞く表現を学ぼう」

「お気に入り聞く表現を試してみよう」

「クラスのお気に入りを紹介しよう」

「アルファベットの大文字と小文字を復習しましょう」

「アルファベットの言い方をよく聞いて、発音したり、書いたりしよう」 など

指導の手順：

- 目標を達成した
- 展開は適切である(内容の問題が格別だ)
- 生徒の反応はクラスによって違う。5年生のクラスの生徒たちが好奇心から質問した。授業が行った時間によっても変わる。用心深い先生たちのおかげで学級崩壊が見られなかった。

指導方法：

- 授業に絵の付いているフラッシュカードをよく使った。
- グループや二人組で習った会話を練習させた。
- 歌（またリズム）をもとに反復により、言葉や会話を覚えさせる。
- 子供たちが英会話しながら、頼りにし黒板に書かれたセリフをどんどん消し、日常会話を暗記させた。
- 教師全員が生徒に英語の使いを激励した。また、日本語を避けろと指示した。

例：English only!

指導言語：ALT がずっと英語で話をしていて。学級担任が日本語で説明したり、学生の不注意な行動をたしなめた。日本語の使い方は適切だった。

学級担任も ALT の忠告に従って、子供たちの前英語を使おうとした。間違った英語や、正しくない発音がよく見られた。

例：

文法や意味の違い：

- A：Finish game. Stand up!
- A: Let's finish English
- K（クラス全体）： Let's!/ Yes!

- A: Let's feed back!
- A: Face up, please! (Turn the page over, so that it's face up. 正面が見えるようにシートをめくってください。)

- A: (次の授業) Work sheet face down!
- A: Big voice please! (自ら治す: Clear voice, please!)
- A: What this?
- A: Pencil put down!

B: Put down your pencils!

A: Look at me!

B によって A の発言の修正がこの例以外見られなかった
発音の大間違い:

- A: Favourite spots {sports}
- A: Shit down {Sit down}
- A: Take out your work シート/seat (sheet を言いたかったとき)
- A: Berry good!
- A: Lady...go!

指導の内容:

生徒に覚えやすい英語を教えたがって、間違った英語を暗記させたことがある。

例: Excuse me! Question OK?

What's your favourite? Choose the best.

指で人間をさしても I like this を使った。

授業構想: (黒板に貼ってある)

1. Greeting 挨拶

A: Stand up please!

K: Yes! (生徒が全員立つ)

A: Let's start English!

K: Let's!

この会話は間違っており、非常に不自然だと A 先生が気付いてから、クラスが Yes!を言うようになった。返事は文法的に正しいだが、英語を母語とする人にとって非常に不自然な発話だ。アメリカ、ヨーロッパの国々、またオーストラリアで反応は言葉ではなく、命令にすぐ従う、行動することである。反応がなっ買った場合学級担任が生徒を反応するように注意した。

クラス全体立ち、お辞儀をせずに「Good morning Miss. B」を言った後、みんな座った。

B 先生が「Good morning everyone!」の挨拶の言葉を言う。

2. Pratise 復習 (ほぼ 10 分)

A. Routine questions (決定質問) B 先生が毎回繰り返した質問。生徒たちが同時に答えた。B 先生がリズムを取るように手をたたく。

a) B : How are you?

K : I'm fine. (Thank you)

B 先生のアドバイスで生徒たちにほかの返事の仕方が教えられた。I'm hungry/I'm sleepy などとも言えるようになった。

b) B: How is the weather today?

K: It's sunny/It's cloudy/ It's raining

初めての授業で曇っていて、雨降りそうな天気を見ても、Sunny と同時に言い返した生徒たちが、Sunny と Cloudy の意味分かってきた。

c) B: What day is it today?

K: It's Wednesday.

d) B: What's the date today?

K: It's Month, Dayth

以上の質問は似ているせいで生徒にとって聞き取りにくいので、同じ順番ではなくゲームにして聞き訳を練習させた。

B. 歌 タイトル : It's a small world

Alphabet song

アルファベットの練習の授業が行う前、アルファベット・ソングを歌った。

It's a small world の場合、音が高すぎ、歌えなかった子供もおり、速過ぎるため追いかけれなかった子もいた。クラスの三分の二歌おうとした。

C. 前回の授業の内容を思い出させ、復習する

3. Activity 活動 (ほぼ25分)

その日の目標を学生に日本語で読ませ、書かせた後メイン活動が始まる。

- 発音 Pronunciation

ALT のあとについて発音する練習 例 : f と v の発音仕方

- モデル会話 Demonstration by the teachers

- 反復練習 Practice by repetition occasionally changing the roles of interviewer and interviewee

- グループワーク Group work

- アルファベットの大文字の復習、小文字を習得

書きながら、似ている文字の微妙な違いを認識した。

4. Feedback フィードバック

子供たちが授業について意見を一言書き、自分お気持ちに一致する絵文字に丸をつける。

監視者の C 先生が短く授業の内容の難しさ、学生のよい態度などについて自分の意見を述べた。

5. Closing おしまい

学生たちを立たせた後、いっせいに「Thank you Miss B」とお別れの挨拶「See you (next week)」した。

さて、授業の参与観察から、小学校における英語教育の特筆すべき状況と課題として、3点あげられる。

- 1) 英語教室の視聴覚教育用の教材が豊かであり、学校は教育機器に不足していない。
- 2) 現場で観察した際、学級担当による言語の間違いに気付いていても、それを見た日本人の ALT はクラスで、その間違いを直さなかった。このような対応は、英語教育から問題と見られるが、そこで問題が見られるが、学級担任と一緒に TT が行なわれているため、学級経営をスムーズにすることを考えれば、適切であったかもしれない。検討の余地がのこされている。
- 3) 文法的に正しい会話パターンを教えることよりも、一般に考えて分かりやすく、使いやすいかどうかを考えて会話パターンが教えられるケースも見られた。例: Question OK?

終わりに

以上、本研究では「大学生の英語に対する態度」に関するアンケート調査、JET プログラムの課題の検討および小学校英語教育の実践の課題の検討を行ってきた。近年、英語は世界のリンガ・フランカとして特別な役割を果し、英語を話し、国際関係を築くため英語および英語教育の重要性が強調されているが、まだまだ英語能力が足りないと言える。

「大学生の英語に対する態度」に関するアンケート調査結果から外国人の友達が日本語を話せることができたなら、英語より日本語を選ぶ人が半分以上だ。日本人が外国人に話しかけ、その外国人が日本語を話せることが分かったら、「多数の日本人がほっとして、主に日本語で会話をしようとする」と外国人の知り合いとのインタビューから分かってきた。絆を作るため、日本語を操る ALT が英語の授業のあと、日本語を使うことによって、日本人生徒の英語を用いて、コミュニケーションをとらなければならないという概念を歪めてしまう可能性がある。筆者はモデルとして「学習モデル」(JTE)のほうが EFL 学生を動議づけやすいという点において英語教育には効果的であると論じている。

JET プログラムのおかげ、以前外国人もみたことがない日本人の学生は外国人と出会い、子供たちの視野が広まった。日本人のほとんどが英語がグローバル化していく世界で重要であることを強く意識している。倦まず弛まず、努力を惜しまなく働き続けることも日本の文化の一つである。前向きに英語教育について考え続け、努力すれば、必ず効果が見られると信じている。

参考文献

Tajima, Kiyoshi (1976) 「English Teaching in Japan」, Workpapers in Teaching English as a Second Language Vol.10, ERIC

安部規子 (2007) 『修猷館の英語教育 一 大正時代を中心に』, 有明工業高等専門学校紀要第 43 号

McConnell, D. (2000) 「Importing diversity: Inside Japan's JET program」 Berkeley, CA: University of California Press

伊村元道 (2003) 「日本の英語教育 200 年」 大修館書店

Butler (2004) 「What Level of English Proficiency Do Elementary School Teachers Need to Attain to Teach EFL? Case Studies from Korea, Taiwan, and Japan」 *TESOL Quarterly*, Vol. 38, No. 2 (Summer, 2004), pp. 245-278

Medgyes, Peter (1992) 「Native or non-native: who's worth more?」 *ELT journal* 46.4, p.340-349

<http://www.jetprogramme.org/> (2015 年 9 月 4 日)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaikokugo/ (2015 年 9 月 1 日)